

瀬戸内海のアシカ獵

西岡達哉

1. はじめに

ニホンアシカ（鰐脚類。食肉目アシカ科：*Zalophus californianus japonicus*。以下「アシカ」と略称する。）は、現在では水産庁のレッドデータブックといわれる「日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料」において「絶滅危惧種」に認定されているが、1950年代までは日本列島の沿岸に広く棲息し、相当量が人間によって捕獲されていたことが知られている海獣である。

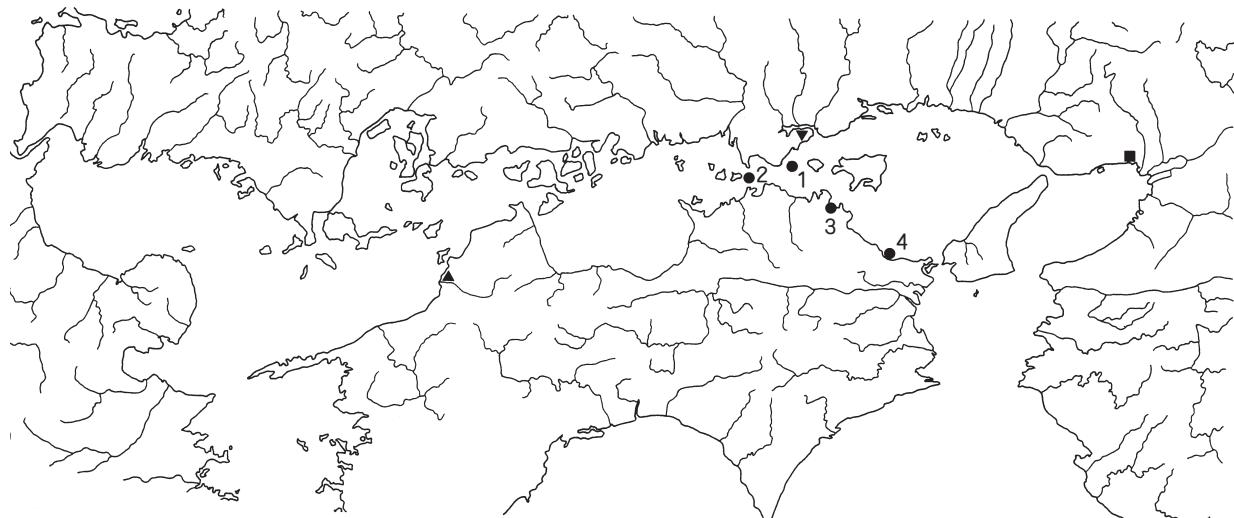
日本列島における人間とアシカの関係については、縄文時代を中心とする遺跡からアシカの遺体が出土することから、紀元前から20世紀半ばまで数千年にわたる長い歴史を積み重ねてきたことになる。

本稿では、瀬戸内海の沿岸地域に残された各種の資料にもとづき、同地域もまたその歴史の一端を担ってきたことを実証したい。

検証は①文字で記録された資料、②発掘された遺体、③発掘されたアシカをモチーフとした模造品、④発掘された獵具の順序で進める。

2. 文字で記録された資料

瀬戸内海沿岸でのアシカに関する歴史的な文献資料として代表的なものには、高松藩初代藩主松平頼重の年代記の「英公実録」がある。原文は第2図のとおりであるが、以下に関係箇所についてわかりやすく読み下した後に、記載内容から明らかになる点をまとめる。



- 文字で記録された資料（地名） 1：直島、2：与島、3：志度、4：引田
- ▲発掘された遺体
- 発掘された模造品
- ▼発掘された獵具

第1図 瀬戸内海沿岸地域におけるアシカ関連の資料分布図

正保4年（1647年）3月25日 舟遊びに出て、鳥撃ち用の銃で海驥（アシカ）を捕って、直嶋（直島）に宿泊した

承応2年（1653年）4月28日 舟遊びに出て、小椎（現在地不詳）に宿泊して、海驥を捕った

3年（1654年）3月16日 舟遊びに出て、海驥を捕った。18日も同様である

明暦2年（1656年）3月30日 舟遊びに出て、鳥撃ち用の銃で海驥を捕った

4月2日 舟遊びに出て、海驥を捕った

4月16日 15日に与島に宿泊して、鳥撃ち用の銃で海驥を捕って、城に帰った

4月27日 舟遊びに出て、海驥を捕った

3年（1657年）2月25日 舟遊びに出て、海驥2頭を捕った

3月4日 舟遊びに出て、鳥撃ち用の銃で海驥1頭を捕った

3月12日 舟遊びに出て、海驥1頭を捕った。13日、18日、19日も同様である

萬治2年（1659年）3月3日 舟遊びで引田浦まで出かけて、2日宿泊して、鳥撃ち用の銃で海驥を捕った

3月16日 舟遊びに出て、海驥を捕った。19日、25日も同様である

寛文11年（1671年）3月13日 志度海へ出かけて、鳥撃ち用の銃で海驥を捕った

以上のように、藩主本人が再三にわたってアシカ猟を行ったことが記録されているが、これらの記述からは次のような点に気付かされる。

| | | | | | | |
|-------------------|-------------|-----------|---------|---------------|----------------|--------------|
| 寛永二〇（西暦1643）・一・一四 | 舟遊至甲 | 嶋驥獺（かわうそ） | 二〇・二・一九 | 舟遊至甲嶋驥獺 | 正保四（一六四七）・三・二五 | 舟遊鳥銃打海驥 |
| | | | | | 承応二（一六五三）・四・二八 | 舟遊泊小椎 獲 |
| 四・四・一一 | 漁人獲浮龜（うみがめ） | 泊直嶋 | 四・三・一六 | 舟遊獲海驥一八日同 | 明暦二（一六五六）・三・三〇 | 舟遊鳥銃獲海驥 |
| | | | | | 二・四・二 | 舟遊獲海驥 |
| 三・三・一六 | 舟遊獲海驥一八日同 | 海驥 | 二・四・一六 | 鳥銃獲海驥帰城一五日泊与島 | 三・三・二・二五 | 舟遊獲海驥二頭 |
| | | | | | 三・三・四 | 舟遊鳥銃海驥一頭 |
| 三・三・一九 | 舟遊獲海驥一頭 | 舟遊獲海驥一頭 | 三・三・一九 | 舟遊至引田浦留二 | 三・三・一九 | 舟遊獲海驥一頭 |
| | | | | | 八日・一九日同 | 舟遊至引田浦留二 |
| 寛文一一（一六七一）・三・一三 | 至志度海鳥銃 | 日鳥銃獲海驥 | 二・三・一六 | 舟遊獲海驥一九日二五日同 | 萬治二（一六五九）・三・三 | 舟遊至引田浦留二 |
| | | | | | 二・三・一六 | 舟遊獲海驥一九日二五日同 |

第2図 「英公実録」

- ①使用された道具は鳥撃ち用の鉄砲である
 - ②捕獲場所は直島（香川郡直島町）、小椎（現在地不詳）、与島（坂出市）、志度（さぬき市）、引田（東かがわ市）など高松藩領の瀬戸内海東部の広範な海域に及ぶ
 - ③獵期は2～4月の晩冬から春先の頃である
 - ④2日連続で捕獲できるほど多く棲息していた
- これらのうち、①については、記録が江戸時代初期のものであるため、当時の鉄砲の主な用途が戦闘用から狩猟用に変化していることから必然的な現象と考えられる。
- ②からは、アシカが棲息していた海域が高松藩領だけでなく、瀬戸内海の広域に及んでいた可能性と同獵が日常的な行為であったことが想像できる。
- ③はアシカの回遊性を示唆しており、同獵も晩冬から春先にかけての限定された時期に集中的に行われたことがわかる。
- ④については、②との関連から瀬戸内海における棲息数の多さを示すものである。

3. 発掘された遺体

伊藤徹魯氏や中村一恵氏などの研究によって、20世紀半ばまでのアシカの棲息範囲は、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸地域を中心に、北海道から山陰地方にかけての日本海沿岸地域や北海道、瀬戸内海にまで広がっていたことが明らかになっている。

しかしながら、古老からの目撃情報や伝承以外では、文献資料や地名などによって棲息の事実が確認できるのみで、物的な証拠については考古資料としての遺体に頼らざるを得ない。

そこで、全国におけるアシカを含めた海獣の遺体の出土状況を渡辺誠氏や金子浩昌氏などの調査結果から概観すると、40箇所以上の遺跡において人間によって捕獲されたと考えられる遺体が採取されていることがわかる。これらのうち瀬戸内海沿岸地域では、愛媛県松山市宮前川北斎院遺跡岸田Ⅱ地区から出土した古墳時代前期に属する遺体が最古で唯一のものである。

同資料は、11号竪穴住居跡内に包蔵されていた加工痕のある尺骨1点であり、報告者の松井章氏によって遺跡内から山陰系の土器が多量に出土する事実にもとづき、日本海沿岸で捕獲されたものが土器とともに搬入された可能性が指摘されている。しかしながら、上記のように近年までアシカが瀬戸内海に棲息していたことを考慮するならば、この遺体が瀬戸内海で捕獲されなかったものと断定することは性急であると考えられる。

なお、四国地方の太平洋沿岸では愛媛県御荘町平城貝塚から縄文時代後期に属する下顎骨が1点出土している。

4. 発掘された模造品

遺体の少なさを補うものとして、アシカをモチーフとした模造品がある。模造品は祭祀などの非日常的な行事のために製作されることが多いため、モチーフとなった事物は当時の社会において重要視あるいは特別視されていたものと考えられている。すなわち、当時の生活の中でアシカが占める位置は想像以上に大きかった。



た可能性がある。

瀬戸内海沿岸地域において、アシカの模造品は芦屋市三条岡山遺跡の弥生時代後期の竪穴住居跡から1点出土している（第3図）。詳細な報告はないが、頭部と考えられる資料である。

5. 発掘された獵具

上記のように、江戸時代の大名が海獣獵に使用した道具は鉄砲であったことがわかった。また、1950年代の日本海の竹島では生け捕るために網が使用されていたことが伝えられている。

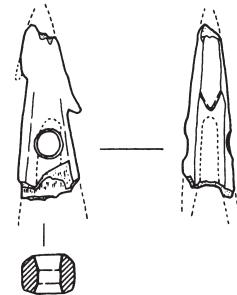
そして、縄文時代に出現した海獣獵の獵具としては回転式離頭鉈がある。しかしながら、渡辺氏の縄文時代の漁業に関する先駆的な研究結果から、礼文島船泊遺跡に特有な船泊型と北海道から東北地方の北部にかけての地域に分布する一王寺型と呼ばれる開窓式の形態のものに限って海獣獵に使用され、仙台湾から九州の北部地域にかけての暖流域に広く分布する燕形に代表される閉窓式の形態のものは主にマグロ漁に使用されたことが実証されている。

なお、参考までに1878年10月に北海道開拓使長官が根室支庁にラッコ獵に関して指示した条例を見ると、①銃殺はなるべくせず、撲殺せよ、②棍棒や弓で捕る実用法を開発せよの2項目があることから、近世末頃の海獣獵の獵具は鉄砲中心であったことが推測できる。

それでは瀬戸内海の沿岸から出土している遺体の捕獲に使用された獵具としては何が考えられるのであるか。

現在、遺体と獵具が共存する事例は認められないが、縄文時代以降のアシカ獵の獵具が主に刺突具であったことから、第一には岡山市郡貝塚から出土した弥生時代中期の閉窓式の回転式離頭鉈が候補になる（第4図）。上記の渡辺氏の見解との齟齬は否めないが、回転式離頭鉈の出現の原因が海獣獵にあったことから、最も可能性が高いものとして看過できない資料である。

同資料は先端部と基部が欠損しているが、索綱（ロープ）を通す索孔とその周辺部分が残っており、鐵（かえし）の位置と形態から渡辺氏の分類では燕形と判断される。現存する長さは4.6cmであるが、原形は10cm以上あったと推定される。

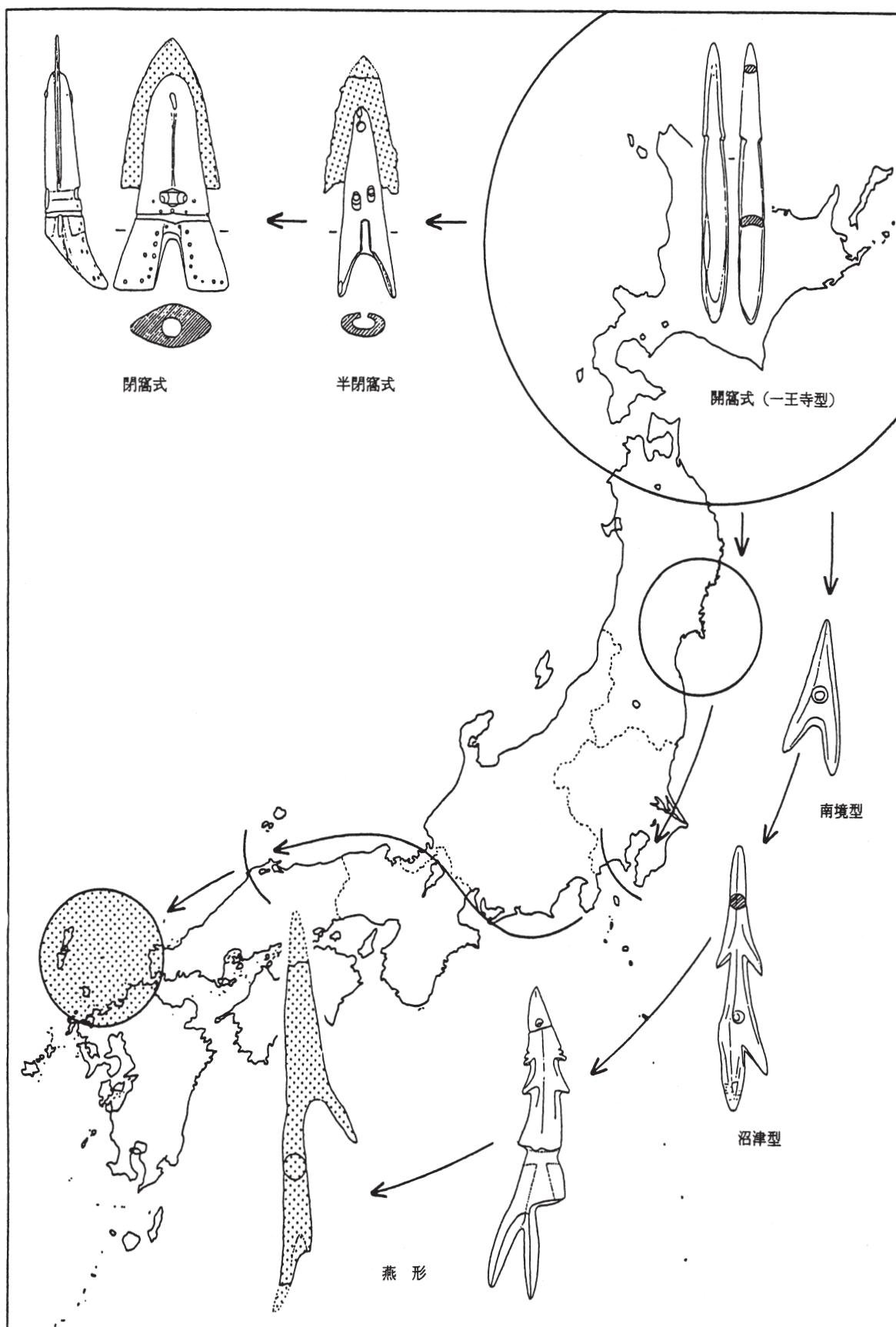


第4図 郡貝塚の回転式離頭鉈

上記のように回転式離頭鉈は弥生時代の山陰地方や北部九州地方においての外洋性漁業におけるマグロ漁の漁具として発達するが、瀬戸内海沿岸の内湾性漁業ではサワラやサメ以外に大型魚の捕獲の機会がないため、依然として海獣獵に使用されたと考えるべきであろう。

第二には近年までの竹島において見られた漁網の有効性が指摘できる。アシカの生け捕りの開始は、動物園やサーカスでの需要が増加した昭和時代のこととされているが、漁網で捕獲した後に、後に触れるように撲殺することは早くから行われていたことは推測可能である。

瀬戸内海沿岸地域においても漁網錘は縄文時代以降に属するものが相当数出土しており、石製品と土製品に大別できる。これらのうち前者は弥生時代中期を中心に有溝石錘が出現するだけで、現代まで一貫して製作され続けられたのは後者である。後者は弥生時代に水田稻作とともに黄河流域から伝播した管状土錘を主流としながら、古墳時代以降に出現する工字形土錘と棒状土錘とともにそれぞれが独特な形態変化を遂げた



第5図 日本列島における回転式離頭鉤の展開図（渡辺誠による）

ことが明らかにされている。

しかしながら、瀬戸内海沿岸地域で出土する漁網錐については形状と使用形態との関連、形状と捕獲対象物との関連などについての研究は全く進行していない。

第三は刺突具や漁網との併用が考えられる撲殺の方法であるが、使用された道具としては棍棒様の形態が考えられるため、定型化された専用の道具は存在しない可能性が高い。

6. まとめ

現存する資料は少ないが、瀬戸内海におけるアシカ獵の実態が少しだけわかつってきた。これは従前の瀬戸内海の漁業の歴史が、故宮本常一氏の調査結果や拙稿を除いて、網漁中心の内湾的なダイナミックさのないものであるという見解に見直しを迫る成果である。

今後、動物遺体の同定技術の深化に伴って、資料数の増加が見込まれ、さらに広域での活発な捕獲活動の様態が明らかになることは間違いない。

参考文献（発行順）

- 渡辺 誠 『縄文時代の漁業』 1974年
金子浩昌 「縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について」 『仙台湾周辺の考古学的研究』
1978年
岡田章雄 『日本史小百科動物』 1979年
渡辺 誠 『縄文時代の知識』 1983年
宮本常一 『対馬漁業史』 1983年
金子浩昌 『貝塚の獣骨の知識』 1984年
渡辺 誠 「西北九州の縄文時代漁撈文化」 『列島の文化史2』 1985年
岡山県史編纂委員会 『岡山県史第18巻考古資料』 1986年
神谷敏郎 『人魚の博物誌』 1989年
金子浩昌・他 『日本史のなかの動物事典』 1992年
金子浩昌 「江戸の動物質食料—江戸の街から出土した動物遺体からみた—」 『江戸の食文化』
1992年
桜井準也 「遺跡出土の動物遺体からみた大名屋敷の食生活—動物遺体分析の成果と問題点—」
『江戸の食文化』 1992年
岡山県立博物館 『なりわいの知恵—とる・つくる・たべる—』 1993年
中村一恵 「アシカ島・トド島の分布—アシカ類地点名の考察—」 『海洋と生物第95号』 1994年
香川県漁業史編さん協議会 『香川県漁業史資料編』 1994年
宮本常一 『周防大島を中心とした海の生活誌』 1992年
渡辺 誠 「朝鮮海峡における漁民の交流」 『日韓交流の民族考古学』 1995年
塚本 学 『江戸時代人と動物』 1995年
多田 実 『境界線上の動物たち』 1998年

- 吉岡郁夫 『人魚の動物民俗誌』 1998年
- 松井 章 「古照・岩子山西麓・宮前川北斎院・斎院烏山各遺跡出土の動物遺存体」
『新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書斎院・古照（遺物編）』 1998年
- 西岡達哉 「瀬戸内海の極大型釣針」 『楢崎彰一先生古希記念論文集』 1998年
- 和田一雄・伊藤徹魯 『鰐脚類—アシカ・アザラシの自然史—』 1999年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 『ひょうごの遺跡32号』 1999年
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 『平成10年度年報』 1999年
- 渡辺 誠・他 『週刊朝日百科33 日本の歴史—火と石と土の語る文化—』 2003年

図版出典

第2図 香川県漁業史編さん協議会1994年

第3図 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1999年

第4図 岡山県史編纂委員会1986年

第5図 渡辺 誠1995年

瀬戸内海のアシカ猟

西岡達哉

ニホンアシカ (*Zalophus californianus japonicus*) は、瀬戸内海で日常的に見られた鰐脚類であつたため、古くから食肉や獸油の利用を目的として猟の対象とされてきた。

しかしながら、現在は絶滅状態にあるために猟が伝承されておらず、その実態を知ることは容易ではない。

本稿は、瀬戸内海沿岸地域で認められるアシカに関する文字資料と考古資料としての遺体、模造品、猟具を蒐集することにより、アシカ猟の実態を明らかにするとともに、従来の瀬戸内海の漁労活動を見直すことが趣旨である。

Issue of Seal Lion Hunting in Setonaikai By Tatsuya Nishioka

Japanese sea lions are Pinniped marine creatures often seen in Setonaikai. Hunting of Japanese Sea Lions for meat and fat by human beings can be traced back to the ancient times.

However, Japanese sea lions have disappeared completely and the hunting of Japanese sea lions is not passed down by generations. So, it is very hard to describe the scenes in that time.

Based upon some written materials, remains, reproduction and fishing gears collected in the coastal area of Setonaikai, this article will restudy the actual situation of hunting activities of sea lions in Setonaikai which has been carried out for a long time.

濑户内海的海狮猎捕问题

西冈达哉

日本海狮(*Zalophus californianus japonicus*)是曾经在濑户内海常见的鳍脚类海洋生物。从古代开始，人们就猎杀日本海狮，食用它的肉，并利用它的油脂。

不过，日本海狮现在已经灭绝，相关的猎捕活动亦未传承下来，所以，很难了解当时的实际情况。

本文通过在濑户内海沿岸地区收集被证实的相关文字资料和遗体、仿制品、猎具等考古资料，了解猎捕海狮的实际情况，并重新认识濑户内海一直以来的捕捞活动。

세토나이카이의 강치잡이

니시오카 다츠야

일본강치 (*Zalophus californianus japonicus*) 는 세토나이카이에서 일상적으로 보여진 기각류 (鰭脚類) 였기 때문에, 옛부터 식육이나 수유의 이용을 목적으로 사냥의 대상이 되어 왔다.

그렇지만, 현재는 멸종 상태에 있기 때문에 사냥이 전승되지 않고, 그 실태를 아는 것은 쉽지 않다.

본 고는 세토나이카이 연안 지역에서 인정되는 강치에 관한 문자 자료와 고고 자료로서의 사체, 모조품, 엽구를 수집함으로써, 강치잡이의 실태를 분명히하는 것과 동시에, 종래의 세토나이카이의 어로 활동을 재검토하는 것이 취지이다.